児童会活動を中心とした自治的能力の向上
～自己成長を実感できる集団づくり～

教職実践開発専攻　　飯　尾　友　謙

1　研究テーマ設定の理由

「今までキャンペーンをしてきてよかった」「緊張したけど、みんなに伝わったからうれしい」「人前で話す自信がついた」など児童朝会で委員会発表を終えた児童の声である。何とも言えない笑顔で話す。学年、学級を枠を超えて、全校的視野に立って活動するからこそ責任や活動の大変さはあるが、その分、活動を成功させたときの達成感や自分への自信は大きなものになる。しかし、委員会活動の中で「面倒くさい」「去年と同じ活動でいい」「やりたい委員会じゃなかったから」などの声を聞くこともあり、やらされている感が強く受動的な姿勢もみられる。この二極化が生まれる要因として、学校生活を楽しく充実したものにしていくとき、高学年を中心とした児童会活動が有効であることは、周知の事実であるが、教師が児童が主体的な活動にできるような手立てを十分に打てていないことが挙げられる。確かに、学級担任の仕事があり、月2～3回の委員会の時間だけで、児童に問題を見つけさせ、じっくり活動を考えさせて、準備をして行動させて、見届けることが難しいことは否めないが、そこにこそ一手を打ち、児童に成功体験をさせることが必要不可欠である。その成功体験につながった意識が、身に付けた見方や考え方が学級にも反映され、ひいては、次期児童会活動を担う学年の児童の意識を高め、伝統になっていく。

また、情報化、都市化、少子高齢化などの社会状況の変化を背景に、学習指導要領が改訂されるたびに人間関係の希薄化や自治的能力、自尊感情の低下が指摘されてきた。中央教育審議会答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」2008）においては、「生活体験の不足や人間関係の希薄化、集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合って解決する力の不足、規範意識の低下などが顕著になっており、好ましい人間関係を築けないことや、望ましい集団活動を通した社会性の育成が不十分な状況が見られる。」と述べられている。

上述した課題が実際に教育現場に存在し、その程度を把握するために、2011年12月に教員と児童に質問紙調査を実施した。児童が『よくしたいこと・力をつけたいこと』で多かった回答が、「自分の考えや思いをみんなの前で話せるようになりたい」（52.0%）、「リーダとしてまとめることができるようになりたい」（48.7%）であった。一方、教員で多かった回答が、「粘り強く目標に向かって取り組む態度」（47.5%）、「仲間のよさをみつける力」（45.8%）であった。1番つけたい力の内容は合致せず、「教員と児童のつけたい力のズレ」がみられた。また、児童会活動を「楽しい」理由として「友達がいるから」「ポスターとか作るのが好きだから」など『自分自身が楽しいこと』、表層的な楽しさが多くみられた。「みんなのためにがんばりたい」「大変だったけど、学校がよくなってうれしい」など『全校的視野で考え、活動する責任の重さとその分のやりがいを感じる』という深層的な楽しさが少ない結果だった。児童の児童会活動を通した「楽しさの質」の差がみられた。

教員の自治的能力が高まっているかどうかの捉えは、半々の回答だった。児童会の自治的能力を「活動の表面的な姿」を主体にとらえるか活動に必然や意義をもっているのかという「内在的な実態」を主体にとらえるかに違いがあった。つまり、教員間の自治的能力のと

らえ方の差がみられた。

以上の問題意識のもと児童会活動を中核にして、意見表明のための表現力の涵養と集団をまとめる力の経験を蓄積しながら、「委員長へのリーダー指導」「担当学級への愛着をもち、信頼関係を深める委員への指導」「次期児童会活動を担う学年への指導」「教員組織への指導」の４点に着目して実践検証をしていく。

２　研究に関わる主要概念等の整理

(1)「自治的能力」の定義

先行研究と関連書籍を参照し、自分のこれまでの経験を踏まえて集約していくと、「集団での生活」「責任・役割を果たす」「意思の反映」「仲間との関わり」「自主的、実践的な行動・態度」「有能さ（社会的存在の自己を見つけ出す)」が自治的能力のキーワードとなる。私は、学級を基盤として、仲間や教師、地域の方々とかかわり合いながら、６年間という発達段階の差が大きい異年齢集団で生活をしていく小学校における「自治的能力」を次のように定義する。

●自治的能力

「よりよい学校生活づくりに向けて、仲間と共によさは生かし、課題は解決しようと集団の一員として自分の責任を果たし、自分の意思を集団に反映させ、自主的・実践的に行動し、成長を実感して次に生かす力」

また、一般化できるように図１のように集約して、「自治的能力の評価の観点」と「自治的能力の資質」は、次の３点に定義した。この資質の３点は指導のサイクルも意味する。

図１　自治的能力の資質・評価の観点

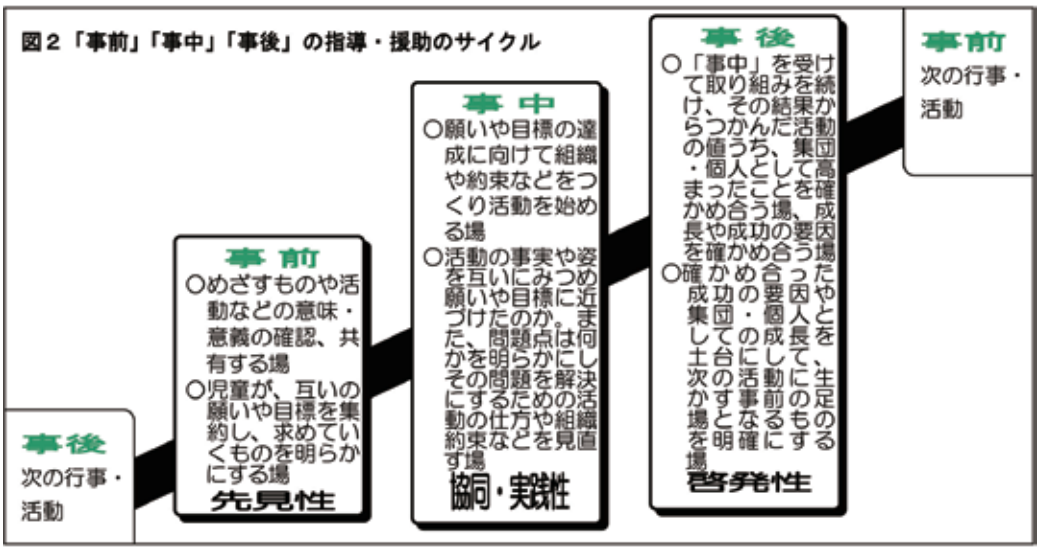
指導	評価の観点／資質	よりよい学校生活を創ることへの関心・意欲・態度	よりよい学校生活を協同して創るための思考・判断・実践	よりよい学校生活についての知識・理解
事前	先見性（見通す力）	○自分の思いや願いをふまえ積極的に学校生活におけるよさと課題をつかみ、自分たちでよりよい学校生活をつくるための計画を立てようとしている。	○学校生活におけるよさと課題をつかみ、自分と仲間の願いや目標をふまえ、自分たちでよりよい学校生活をつくるための計画を立てている。	○自分たちでよりよい学校生活をつくる意義や組織、そのための計画などについて理解している。
事中	協同・実践性（果たす力）	○よりよい学校生活をつくる計画を基に自分たちの願いや目標の達成に向けて組織や約束などをつくり活動に取り組もうとしている ○活動の事実や姿を互いにみつめ、願いや目標に近づけたのか。また、問題点は何かを明らかにし、その問題を解決するための活動の仕方や組織や約束などを見直そうとしている。	○よりよい学校生活をつくる計画を基に、自分たちの願いや目標の達成に向けて組織や約束などを考え、判断してつくり、協同して実践している。 ○活動の事実や姿を互いにみつめ、願いや目標に近づけたのか。また、問題点は何かを明らかにし、その問題を解決するための活動の仕方や組織や約束などを見直し、協同して実践している。	○よりよい学校生活をつくる計画を基にした自分たちの願いや目標の達成に向けて組織や約束などについて理解している。 ○活動の事実や姿を互いにみつめ、願いや目標に近づけたのか。また、問題点は何かを明らかにし、その問題を解決するための活動の仕方や組織や約束などについて理解している。
事後	啓発性（見出す力）	○よりよい学校生活をつくるために、協同して実践してきた結果をもとに、成功の要因や集団・個人の成長を実感し、確かめ合おうとしている。 ○確かめ合った成功の要因や集団・個人の成長を土台にして、次の活動に生かすことを明らかにしようとしている。	○よりよい学校生活をつくるために、協同して実践してきた結果をもとに、成功の要因や集団・個人の成長を実感し、確かめ合っている。 ○確かめ合った成功の要因や集団・個人の成長を土台にして、次の活動に生かすことを明らかにしている。	○よりよい学校生活をつくる実践結果を基にした成功の要因や集団・個人の成長を理解している。 ○確かめ合った成功の要因や集団・個人としての成長を土台にして、次の活動に生かすことを理解している。

□指導のサイクル　事前 先見性（見通す力） → 事中 協同・実践性（果たす力） → 事後 啓発性（見出す力）

(2)「自治的能力」の育成の手順：「事前」「事中」「事後」の指導・援助のサイクル

自治的能力の資質と連動させて、特別活動における一つ一つの行事や活動を、そのねらいを達成して児童が成長を実感できるように、3つの段階を一連とした指導･援助を実践していく。それが、図２に示す、『「事前」「事中」「事後」の指導・援助』である。この各段階は、「事前」：先見性（見通す力)、「事中」：協同・実践性（果たす力)、「事後」：啓発性（見出す力）と資質と連動する。

「事前」では、行事や活動への意欲を喚起し、目標と手立てをもち活動をしていく。「事中」では、活動の中間のふり返りを行い、活動の質を向上させていく。「事後」では、行事や活動の成功を振り返り、成果と課題を明確にしていく。そして、「後付け」が、次の行事や活動の「事前」の足場になる。



この指導・援助の形態は、**「形態１：問題解決型」と「形態２：成果向上型」**の２つに分けられる。

形態１：問題解決型（マイナスをプラスにする）

基本の形態であり、活動・意識の停滞をの事実から問題解決する「事中」が核になる。

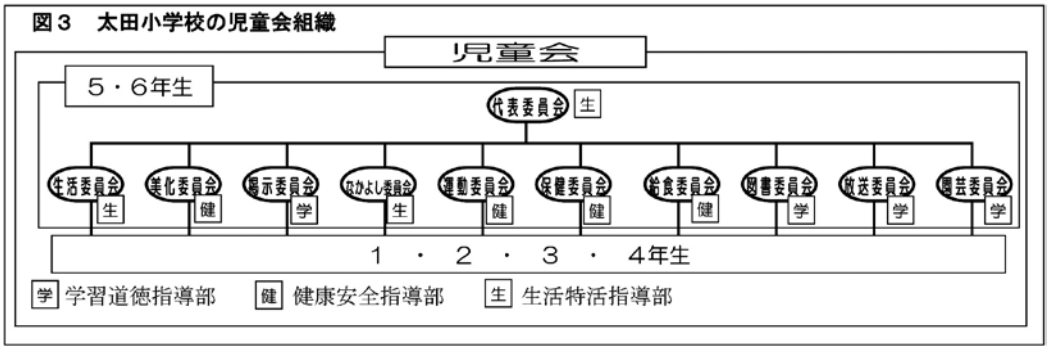
形態２：成果向上型（プラスを更にプラスにする）

児童の自治的能力が向上し、成果をより向上させる行事活動の指導・援助に適している。活動中間の成功や成果の要因を受けて、更に向上させる「事中」または、成功や成果の要因を明確にする「事後」が核になる。

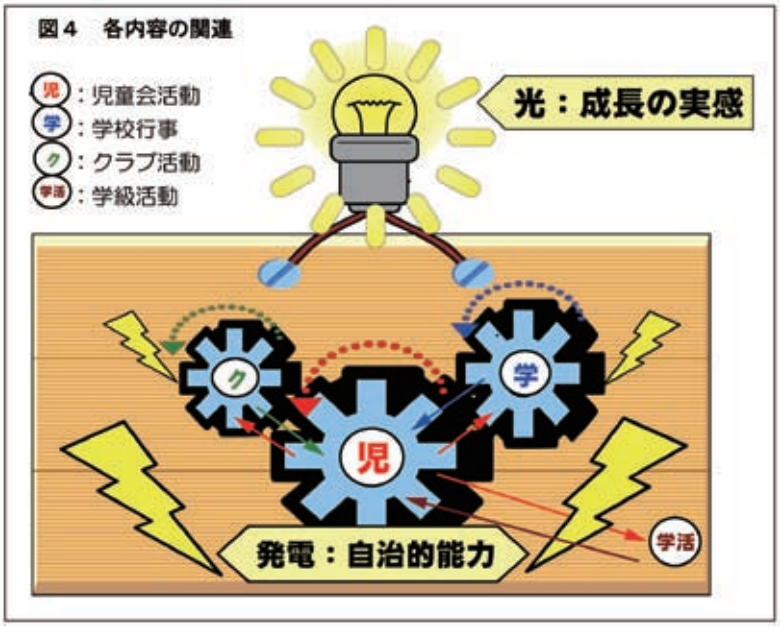
(3) 美濃加茂市立太田小学校の特別活動：各内容の関連

太田小学校の児童会組織は、各委員会及び児童会集会活動（児童朝会など)、児童会が連携できる学校行事を取りまとめる代表委員会を中心に、11の委員会で組織されている。そして、11の委員会は活動内容に対応して教員側の３指導部（学習道徳指導部・健康安全指導部・生活特活指導部）に分けられ、委員会担当

はその指導部の教員が務める。関連は図３に示す。



研究テーマに関わる「自治的能力」を『電気』に、「成長の実感」を『電球の光』に、「児童会活動」「学校行事」「クラブ活動」を『歯車』に、「学級活動」を『基板』に例え、特別活動の各内容を次のように定義して、図４に関連を示す。



①中心となって回転して「自治的能力」の電気を発電するのが、「児童会活動」である。そのため、「モーター付き歯車」になる。

②「学校行事」は、児童会活動で付けた力を発揮する場の「歯車」になる。その「学校行事」の取り組みから生み出された力は、児童会活動の歯車の回転に返り相互に加速する。

③「クラブ活動」は、異学年で活動する中でリーダーシップや憧れを育む場の「歯車」になる。その「クラブ活動」の取り組みから生み出された力は、児童会活動の歯車の回転に返り相互に加速する。

④「学級活動」は、教育活動の母体でもあり、各歯車が効果的に回転できるように、各歯車の固定と安定を担う。

⑤児童会活動を中心に各歯車が回転すればするほど、「自治的能力」は発電され、「児童の成長の実感」の電球の光が輝く。そして、他の教育活動も照らされていく。

３　研究内容・方法

(1) 委員会全体の自治的能力を高め児童会活動の充実を図るための委員長へのリーダー指導

①委員長会の設定

委員会運営を初めて行う委員長の不安を解消し、リーダ性を引き出して成長を実感させるために、委員会の時間を迎えるに当たり、自治的能力の育成の手順で示した事前・事中・事後のサイクルを活かした委員長会を行う。

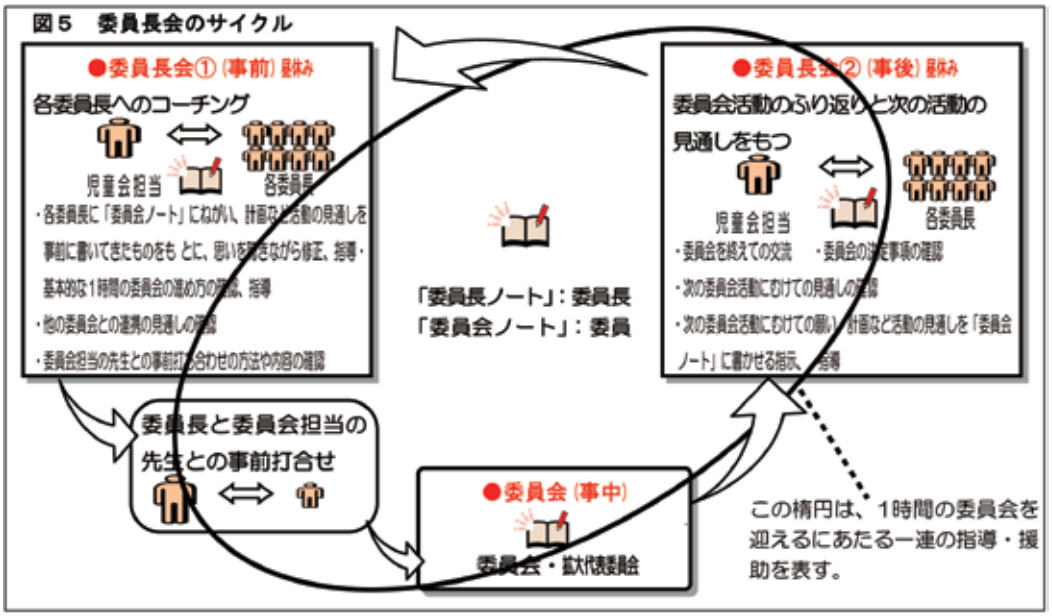
事前の委員長会では、月の見通しを共通理解し、委員会の時間への願いを聞きながら、アドバイスをして、委員会の時間の目標と流れ・板書などの計画を立てる。それをもとに委員会担当の教員の所へ行き打合せを行い、委員会に備える。これらの計画は「委員長ノート」に記載する。

事中は委員会の時間で、その計画をもとに活動していく。基本的に終盤に、委員長は「委員長ノート」に、

委員は「委員会ノート」にふり返りを書き、回収して委員長と教員は目を通して朱筆を入れる。

事後の委員長会では、委員会の時間をふり返り、自分の目標や委員の様子などを交流しながら、次の委員会の目標を明確にして、次の委員長会①に備えて、「委員長ノート」に委員会の願いや活動計画を書いてくるように指示、指導をする。

図５のように、このサイクルの実践を積み上げていく。



また、委員長会の中で、委員長として頑張っていた姿や活動などを児童会担当が取材したり、「委員長ノート」や「委員会ノート」、下学年の日記等の記述をもとにしたりして、写真のような委員長専用の通信を「委員長会だより」として、機会あるごとに発行した。頑張りを認め励まし、価値づけていった。

②「委員長ノート」の作成と活用

委員長としての目標や委員会の計画など委員会の見通しを立てるために、毎回の委員会をふり返り、成長の足跡を残せる、委員長共通の専用ノートとして「委員長ノート」を作成し、活用してきた。

記載項目は、「委員会の時間の計画」（1時間の流れや板書、伝えること等）、「委員会の自分の目標」、「仲間の姿のふり返り」、「自分のふり返り」であり、特に仲間のよさをみて語れるように指導してきた。

そして、委員長会②（事後）で回収し、主に児童会担当が中心となって朱筆を入れ、委員長たちの成長やよさをつかみ、記載内容から「委員長会だより」や職員会の提案として、委員長と職員によさや頑張りを伝え、価値づけている。

③「児童朝会」の運営

委員会活動は、学級・学年の枠を超え、全校の場に立ち働きかける活動が多く、大勢の前で自分の、自分たちの思いや考えを表現したり、活動を呼びかけたり、成果や感謝を伝えたりする。それは、人目もあり緊張する中であり、とても勇気がいることである。質問紙調査でも、「人前で話すことが苦手」の回答が多い一方で、伸ばしたい力は「自分の考えや思いを話せる力をつけたい」と多く回答がなされていた。だからこそ、人前で話す体験を積ませて、成功を実感する場を多く設けていくことが必要不可欠である。そこで、月1回の「児童朝会」を位置づけた。

「児童朝会」では、各月の指導の重点と委員会活動をリンクさせ、活動の呼びかけや成果を全校の場で発表する、全委員会が全員で全校の前で発表する機会となる。勿論、ここにも当日を「事中」として、それまでの委員長を中心として企画・練習を昼休みなどを使って行う「事前」、発表後に集まるふり返りや次の委員会でのふり返りの「事後」がある。そして、委員長を中心に、委員全員で発表の取り組みをしていく中で、委員長としてまとめる経験となり、培ったリーダー性の発揮の場、成長の度合いを観る場にもなる。

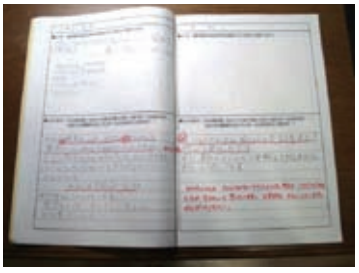
④「拡大代表委員会」の運営

1学期から2学期9月の運動会までは、委員長のリーダー性を自分の委員会を運営していくことで向上させて、委員長の一人一人の、委員会の一つ一つの自治的能力を段階的に培ってきた。自治的能力の「点」を大きく強くしてきた。基本的な動き方がわかってきたからこそ、2学期以降は「点」の育成を図りながらも、自分の委員会活動だけにとらわれずに、他の委員会活動も把握しながら、お互いに協力・連携できたり、話し合い最善策を出したりなどしていき、「点」を太くしてつなげて「線」にしていく自治的能力を培っていった。それが「拡大代表委員会」であり、代表委員会が企画運営の中心となって月1回を基本に委員長が集まり、お互いの企画書を見ながら各委員会の活動を共通理解すると共に他の委員会との協力・連携を図り、児童会スローガンの達成を加速させることを目的に位置づけてきた。

実践例の1つとしては、9月運動会の成功でえた仲間を思いやる「あったかハート」を12月の人権集会につなげて、自分たちの成長を地域や家の人に発信し、自分たちの自信にしようという、拡大代表委員会の総意のもと、活動を展開した。4月から代表委員会が展開してきた名前をつけてあいさつをしあう「かがやきあいさつ」を、給食・図書・美化委員会に関連するあいさつも連動させて、放送・掲示員会が宣伝や掲示物で啓発する動きを展開した。同時にあいさつに込められる思いを目に見えるようにするために代表委員会が「かがやきあいさつパズル」を作成し、人権集会当日までに全学級が完成させて発表する動きも展開した。お昼の放送であいさつ名人として紹介された児童は1ピース貼れると共に、各学級ごとにあいさつに関する目標を決め、1日達成できたら1ピース貼る形式で行った。拡大代表委員会を中心に全校が一丸となって「かがやきあいさつ」を広げ人権集会を成功させたことがあげられる。児童会が関連する学校行事においても、運動会の成果の「点」を人権集会につないで「線」とした。その紡ぐ原動力が委員会と拡大代表委員会であった。

(2) 担当学級への愛着をもち、信頼関係を深める委員への指導

①「委員会ノート」の作成と活用



コンセプトは、先述した「委員長ノート」と同じである。5・6年生委員の専用ノートを作成し、委員会の時間で決まったことや次回までに考えてくること、担当学級の様子の記録、委員会での自分自身のふり返りなどを記載する。最終的に、委員長が回収して、児童会室の委員会ロッカーに

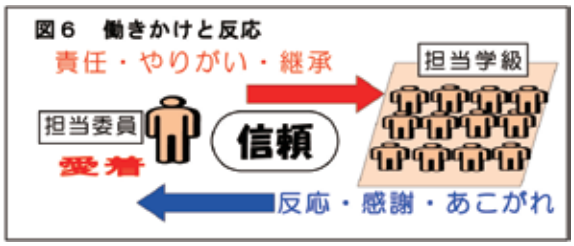
持ってくる。その際、委員長もコメントや見たサインを記して認め励まし、委員会活動への意欲を喚起を図った。児童会担当も各委員会担当も委員長同様に「委員会ノート」をみて、次の委員会や職員会提案に生かした。

②主体的に担当学級へ働きかける委員会活動

担当学級を決めることで、一人一人の活動がより具体的になり、責任とその分のやりがいを実感できる。単なるお知らせ係にならないように、通信や放送など担当学級への働きかけを工夫し、担当学級とのラインを強くしていくことになる。また、学級は、担当の委員の子の姿や思いを受け、委員会活動に憧れをもつことや、実践内容③につながる学級の班活動に結びつけて活動が広まる。そこに、信頼が生まれ、学級の自治的能力の高まることも期待できる。図６のようにまとめられる。

実践例の一つとしては、代表委員会では、毎朝、担当学級に立って、「かがやきあいさつ運動」を展開して、あいさつの手本となる児童をお昼の放送で紹介してきた。しかし、放送の翌日によくなる子が増えても、自分の放送曜日がくるまで紹介できないため、担当学級版の「児童会だより」を週刊発行して、適宜紹介できる活動を展開していった。そして、学級の生活班のあいさつ活動を連動させたり、同じように通信を作成したりと、各学級の各学年の活動へと広がっていった。この「児童会だより」は、各学級に掲示され、現在まで30号近く発行され、内容があいさつだけでなく、各学級の太田小学校の伝統である「あったかハート」な活動（相手を思いやった心で動く活動）を取材して、記載して紹介している。

図６　働きかけと反応



(3) 次期児童会活動を担う学年における児童会活動への意識を高める指導

①児童会活動と連動させた班・係活動の展開

委員長選挙が５年生３学期にあるものの、初めてということも否めないが、やはり、委員会に自分が所属してから動いていくという傾向が強い。委員会活動に対する主体的な意識は弱い。突き詰めると、委員会活動が、学校生活を支えている、支えられている実感が弱い。委員会に所属していない下学年は、学年の発達段階は踏まえた上で、十分に学級との関連で身近に感じさせていない。委員会動を直接担う５・６年生時の育成も大切であるが、担う前の学年こそ育成していくことが、児童会活動の質を高め、自治的能力を向上させ、成長の実感をつかむことができると考える。大輪を咲かすならば、その前の種や芽の頃から手がけていかなければならないのである。栄養などが吸収しやすいように咀嚼しなければならないのである。本研究では、そこにも着目して一石投じたい。

１学期５月の質問紙調査で、４年生の委員会活動における認知度は、否定的な回答（知らない・どちらかと言えば知らない）は53％である。希望の委員会については、４年生は55.6％と多い。４年生で委員会活動を直接体験していないことは否めないが、この現状のままでは委員会活動を「あるからやる」「言われるからやる」の絶えず受け身的な姿勢となり、５年生に進級した委員会始動時の意欲は低い。

学級づくりの側面から考えても、委員会活動のキャンペーンなどを学級で咀嚼して、該当する班活動や係活動とリンクさせていけば、全校の成功・成長になるのは勿論、学級の個の成功・成長となる。そして、さらに委員会活動を身近に引き寄せて活動することとなり活動を知ることにもなる。

その実践例として、４月からの「かがやきあいさつ」の学級・学年への広まりを示していく。次世代を担

う４年生の顕著な実践を示していく。

１組では、毎朝学級の前に立つ代表委員の姿をみて、その願いをこめた担当学級版の「児童会だより」で思いを知り、生活班の児童の「応えたい」思いが、毎朝、担当学級の代表委員と一緒に立って、名前を教えてあげながら学級の仲間にあいさつをしていく姿となった。動きが学年全体になった。６月にはいると、「自分たちでも、よい仲間を紹介してさらにに広めたい」、「放送で１組みんなが紹介されたい」という思いから、取材ボードをもってあいさつ運動に取り組み、具体的によい姿を帰りの会などで紹介する動きへと進展していった。学級全員が自然と参加できるようになると、授業や給食などあらゆるあいさつを含めて、「元気なあいさつ」が１組の自慢になっていった。11月に入り、全校朝会で拡大代表委員会から人権集会の願いを知った後、全校にさらに「かがやきあいさつ」を発信したい思いから、学級全員で１階中央廊下に立ち、生活委員や自主的に参加している２年生の児童ら12人と一緒にあいさつ運動を展開する姿がみられた。

３組では、１組と同様に担当学級の代表委員の思いを受け、生活班が中心となって、一緒にあいさつ活動が学級全員で継続されている。１組との違いは週刊の「担当学級版の児童会だより」に感銘を受けて、班活動の時間に自分たちでも作成して発行していること、「かがやきあいさつパズル」を受けて、２学期締めくくりの各班のキャンペーンをパズル形式を取り入れ、「かがやきあいさつパズル」も含め、全パズルを完成させる動きをつくっていることが挙げられる。環境班が掲示委員会のイラスト大会を受けて学級版のイラスト大会を企画したり、健康班が保健委員会の歯磨き週間を受けて継続させたりと委員会活動を学級の班活動に取り入れている。

生活班が取材しながら、学級の前であいさつ活動をしている。

人権集会に向けて、２年生と共に、1階中央廊下でのあいさつ運動をしている。

担当学級の代表委員とあいさつ運動をいている3年生

担当学級の代表委員とあいさつ運動をいている2年生

２組も含めて、次年度委員会に入る４年生が、先陣を切って学級で咀嚼していることは、担当学級の代表委員の愛着ある活動とそれを学級ごととして受ける、応えるよさを価値付けてきたことが大きい。

この「あいさつ活動」を核とした動きは、発達段階による活動内容の差はあるが、２年生、３年生にも広がっている。

②児童会活動に対する思いや反応の価値付け

各委員会のキャンペーン活動や「児童朝会」の発表を受けて、学級で朝の会や学級活動などで思いや考えを交流したり、日記やふり返り作文に思いや考えを書いたりして、学級の自分たちに引き寄せてとらえる場を位置づけてきた。実践例の１つとしては、「児童朝会」を終えたあとの発表側と聴いた側でふり返る作文や自主学習などでの日記、５年生では国語の報告文章作成の単元で１学期の委員会活動を取り上げる教科学習と結びつけた実践がある。

(4) 児童会活動への意識を高め、各委員会及び学級の連携を促進する教員組織の指導

委員会活動のねらいや日程、他の委員会活動の取り組み、子どもたちの変容及びその要因を明確にして、教員が委員会活動に見通しをもち、共通理解した上で負担をなるべく軽減しながらも効果的な児童会活動の

啓発ができるように、職員会や打合せなどで、児童会担当から児童会活動の提案・発信をしてきた。児童会活動の見通しをもってもらうことは勿論、教員自身も刺激を受け、意欲を喚起できることをねらい、日常の各委員会活動をしている児童、その活動を働きかけられている児童の様子を観察したり、時に聞き取りをしたりした。また、委員会担当や学級担任に取材をしたり、自分の実践経験や過去の効果的な事例も集約したりした。分かりやすく参考になる、感化される提案づくりに努めた。

4　成果と課題

2012年５月と12月に、教員と児童に質問紙調査を実施した。図７は本研究の主題、成果に直結する設問の集計結果である。どの項目も１学期に比べ、ポイントが向上している。本研究の成果は、端的に言うならば、次の４点である。

①「自治的能力が向上したこと」
②「次期児童会活動を担う４・５年生の委員会活動への意識や憧れが向上したこと」
③「リーダー性が向上したこと」④「児童会活動への楽しい実感が向上したこと」

その要因は、次のことが挙げられる。

○委員長会による委員長への「事前」「事中」「事後」の指導援助を積み上げてきたことで委員長に委員会の見通しをもち、仲間のよさを価値付け、まとめる力が向上してきた。

○「委員長ノート」を活用しながら委員長会を重ねることで、委員会活動に見通しを持ち、自信をもって委員会を進め、委員長のリーダ性が高まってきた。

○計画や練習などを自分たちで考え、実践し、全校の前で発表することで、当日までの取り組みの大切さや発表することの充実感を個人差はあるがつかむことができた。

○学級の生活班や係活動と連動する動きをつくり、活動している側と応える側のよさを紹介して価値付けていくことで、組織的な動きが高まり、下学年に「委員会」の存在をより実感させることができてきた。

○「委員会ノート」を活用し、各自がふり返り、そこから教員や委員長がよさを見届けることで、委員会を通して成長を実感し、次の活動に自発的に取り組む児童が増えてきた。

○委員会活動でのよい人を紹介して活動を広めたり、具体的な活動内容を伝えたりする、担当学級を母体とした委員会の工夫した働きかけがみられるようになってきた。

○「拡大代表委員会」により、各委員会で付けたリーダー性を互いに連携・協力することによって、視野を広げた自治的能力を高めることができてきた。

○再度、児童会活動の意味や意義を学級単位でとらえることによって、「学級としてどういう機会にできるのか」「そのためにどのように取り組むのか」という組織的な活動の仕方を身に付けていくと同時に、児童会活動をより身近にとらえることができてきた。

○職員会や打合せなどで、児童や教師の名前を出し、具体的な活動の歩みとよさを価値付け、広めていくことで、委員会や学級で考えや思いを交流する場を多くしたり、学級の係活動・班活動に連動させていく動きが増えた。

課題としては、次の３点が挙げられる。

①評価の手立ての効果的な活用・改善
②児童会活動を学級で咀嚼する手立ての系統化
③実践継続に基づく年度の引継ぎのあり方

特に、①の評価に関しては、自治的能力やリーダー性の資質や評価の観点を定義し、「委員会ノート」「相

互評価カード」「委員長カルテ」など、各立場から、評価の手立てを打ち出した。しかし、限られた委員会活動の時間の中では、その手立てをより、精選・改善して、短時間で活用できるものにすることが次の段階と考える。

更に研究を実践継続して、子どもが成長を実感し、教員が活用できる研究になるよう精進していく。

図７　2012年5月と12月の質問紙調査の集計比較（各集計からの抜粋）

① 教員の実感している自治的能力と児童会活動への意識・憧れ（4点満点）

	１学期	２学期
児童会活動の自治的能力	2.50 (0.51)	3.13 (0.45)

上段：平均値
下段：標準偏差

	２学期
児童会活動への意識・憧れ	3.21 (0.42)

② 教員の児童に付けたい力や態度の定着度（4点満点）

	１学期	２学期
リーダーとして仲間をまとめること	2.21 (0.72)	2.67 (0.57)

上段：平均値
下段：標準偏差

③ 5・6年生の委員会活動に必要な力（4点満点）　上段：平均値　下段：標準偏差

	全体		５年生		６年生	
	1学期	２学期	1学期	２学期	1学期	２学期
リーダーとしてまとめることができている	2.24 (1.05)	2.65 (0.95)	2.08 (1.09)	2.39 (0.83)	2.40 (0.99)	2.91 (1.0)

5・6年生の委員会活動における楽しさの実感（4点満点）　上段：平均値　下段：標準偏差

	全体		５年生		６年生	
	1学期	２学期	1学期	２学期	1学期	２学期
委員会が楽しい	3.18 (0.88)	3.36 (0.8)	3.27 (0.88)	3.39 (0.81)	3.08 (0.88)	3.34 (0.79)

④ 4年生の委員会活動の認知度（4点満点）

	１学期	２学期
委員会の認知度	1.44 (0.50)	3.25 (0.59)

上段：平均値
下段：標準偏差

⑤ 4・5年生の委員会活動への意識・憧れ（4点満点）　上段：平均値　下段：標準偏差

	全体		４年生		５年生	
	1学期	２学期	1学期	２学期	1学期	２学期
委員会への意識・憧れ	1.71 (0.46)	3.36 (0.68)	1.38 (1.01)	3.41 (0.69)	1.83 (0.38)	3.32 (0.68)